

## 15. 5世紀の技術革新

多くの渡来人がやってきたことで、5世紀にさまざまな新しい技術やモノがもたらされました。

そのひとつは須恵器の生産です。5世紀初頭前後に、斜面につくられた窯を使って1000度以上の高温で土器を焼く技術が日本にもたらされます。そうして焼かれた土器が灰色で、非常にかたい須恵器とよばれるものです。のちの常滑（とこなめ）・備前（びぜん）などの焼き物につながっていきます。

古墳時代最大の須恵器の生産地が大阪府の堺市や和泉市付近にある、陶邑窯跡群（すえむらかまあとぐん）です。5世紀から10世紀まで操業が続けられたようで、500基以上の窯跡がみつかっています。

もうひとつは、大量の鉄製の武器、武具、農具などの生産の発展です。5世紀はじめに渡来工人がやってきたことで、それまでの小規模で点々とあった工房だけでなく、特定地域に大規模な鍛冶工房がつくられたようなのです。大阪府の交野市森遺跡や柏原市田辺遺跡・大県（おおがた）遺跡などが5世紀ごろ突如あらわれる大規模な鉄器生産工房の代表例です。

そこでは、新しい鉄器加工技術の導入によって、鋌留（びょうどめ）技法で大量のヨロイ・カブトの製作が行われたり、新型の農具の生産が開始されました。それまでとは明らかに生産規模が違っており、鉄器生産の大きな転換期と考えられます。